

奈良・石神遺跡 いしがみ

1 所在地 奈良県高市郡明日香村飛鳥

2 調査期間 一 第一三次調査 二〇〇〇年(平12) 一〇月～
二〇〇一年二月、二 第一四次調査 二〇〇一年

七月～十二月

3 発掘機関 奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

4 調査担当者 代表 黒崎 直・田辺征夫

5 遺跡の種類 宮殿関連遺跡

6 遺跡の年代 飛鳥時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(吉野山)

石神遺跡は飛鳥寺の西北、水落遺跡の北に接する。七世紀を中心として、計画的に配置された建物群が稠密に分布する。特に七世紀中頃の遺構は大規模で最も整っており、斉明朝の公的饗宴施設であるとの見方が強い。須弥山石と石人像が発

見された東南の地点を皮切りに一九八一年に調査が開始され今回で一三次・一四次目となる。

調査地は石神遺跡の既往の調査区では最北部に位置している。従来の調査では、水落遺跡との間を区切る遺跡南限の東西堀が確認されているものの、対応する北限の堀が以北の調査区では見つからないことから、遺跡北限の検出が期待された。以下、一三次・一四次調査の成果をまとめて検出遺構の概略を記す。

七世紀前期～中期(A期)。従来知られていた遺跡南限の東西堀SA六〇〇から、大宝令大尺で五〇〇尺、小尺で六〇〇尺を測る地点に、存続時期の異なる二条の東西掘立柱堀(SA三八九三、SA三八九五)が検出され、遺跡北限が確定した。二条の堀のうちより古いSA三八九三には、外側(北側)に遺跡最大の幅を持つ東西石組溝SD三八九六、内側(南側)にやや小規模な東西石組溝SD三八九一が並行する(A2期)。SD三八九六は次の段階でいったん埋め立てられ、やや幅が狭く底石を敷く石組溝SD三九五〇が同位置に設けられる(A3-1期)。その後、堀が北側に移設される(SA三八九五)のに伴い、南側の溝SD三八九一も石材を抜き取られて北に移設され、ほぼ同規模の東西石組溝SD三九〇二として同じ石材で再構築される(A3-2期)。これらの東西溝には南から流れてくる南北溝が取り付くが、周辺遺構の変遷に伴い、南北溝も数回にわたって付け替えや改修が行なわれた。なお、調査地内におけるA期

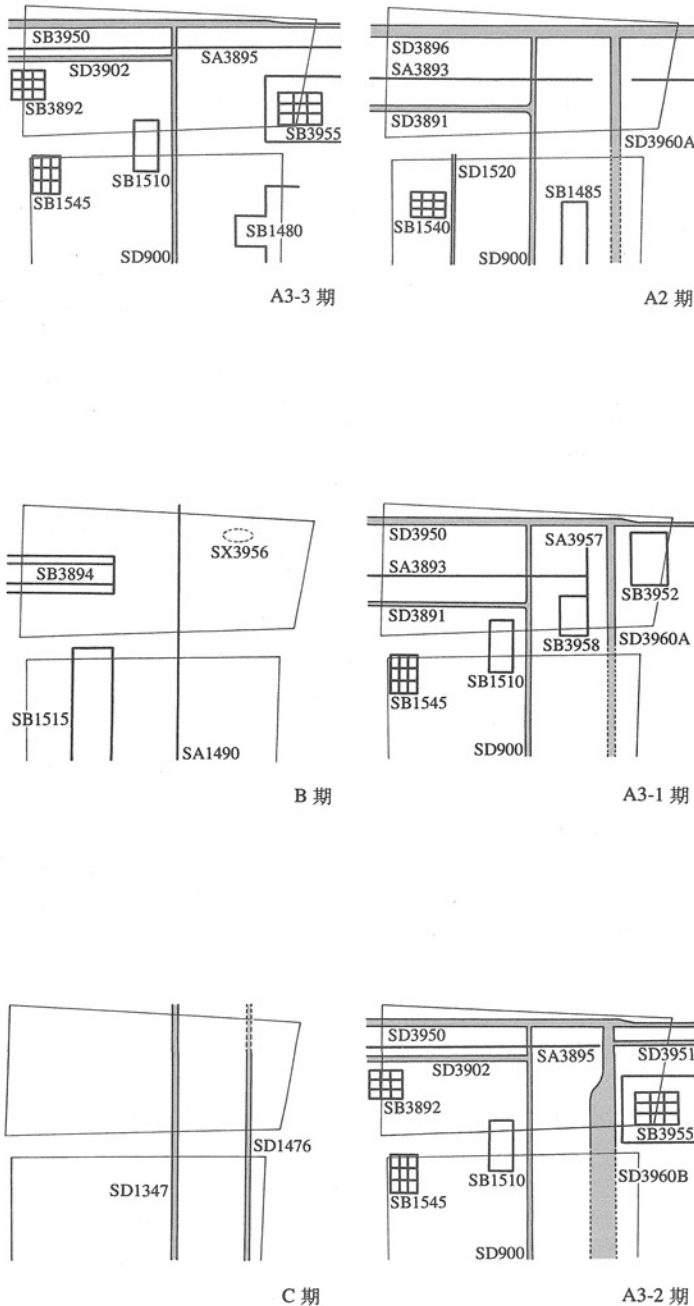
同字とみられる。(9)は表面の腐朽が進み判読が難しい。評制史料であらうが、サト表記は確認できない。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇一』(二〇〇一年)

同『奈良文化財研究所紀要二〇〇二』(二〇〇二年)
同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一五(二〇〇二年)
同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一六(二〇〇二年)

(竹内 亮)



遺構変遷図